

出題 蜚雪ゼミナール

長良北校・築樋拓真



国語を様々な側面からみて、日本語の面白さや深さを知ってもらえればと思います。

問題【国語】

() に言葉を入れて「物事のありがたみが分からない」を表すことわざを完成させましょう。

- (1) 猫に () (2) 豚に () (3) 馬の耳に ()

豆知識 雑学コラム

同じ意味のことわざ

今回はことわざについて考えていきたいと思います。問題の答えは「猫に小判」、「豚か。考えてみましょう。」

「馬の耳に念仏」ですね。それぞれの動物にそんなものを与えても意味がないという意味の言葉で、「なるほど、確かにそうだな」と納得しますよね。しかし、その一方で「同じ意味のことわざなら、一つあればいいのでは？」と思う人もいるかもしれません。なぜ、同じ

意味のことわざが三つもあるのでしょうか。考えてみましょう。まず、「猫に小判」ですが、このことわざは江戸時代に生まれました。当時も現在と同じで、身近な動物と言えば、犬と猫でした。犬は、芸も覚えたり、見

えたりすることがあまりないため、犬に比べて、賢くない(=いろいろなことがわかってない)イメージがありました。そして、小判は江戸時代のお金で1枚数万円の価値があり、高価なものの象徴でした。こうして、「賢くない猫には高価な小判の価値なんてわからない」ということで「猫に小判」ということわざが生まれました。

次に「豚に真珠」ですが、このことわざの由来は聖書にあります。聖書の中にある「豚に真珠を与えてはならない。豚はそれを踏みにじるだろう」という文がもとになりました。聖書が由来と聞くと意外な感じがしますが、他に「目からうろこが落ちる」なども聖書由来のことわざです。

最後に「馬の耳に念仏」ですが、これは漢語の「馬耳東風」からきたものと言われています。「東風」とは「東から吹く風」のことで「心地よい春風」のことです。「馬の耳に心地よい風が吹いても馬はそれに何も感じない」ということから、「馬耳東風」は「他人の意見や批評をまったく気にとめず聞き流すこと」という意味で使われます。この「馬耳東風」から「何をしても意味がないもの」の象徴として「馬の耳」が使われて「馬の耳に念仏」ということわざが生まれました。江戸時代の人々になじみのあるものから、聖書の中から、漢語からとそれぞれ違う由来があることから三つのことわざが生まれているのです。

【解答】

- ① 猫 (1)
② 豚 (2)
③ 馬の耳 (3)